

氏 名	しん ちゅん せん 辛 椿 仙
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	教 博 第 20 号
学位授与の日付	平 成 12 年 7 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教 育 学 研 究 科 教 育 科 学 専 攻
学位論文題目	和田実における「幼児教育論」の成立と展開に関する研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 山 崎 高 哉 教 授 辻 本 雅 史 助教授 鈴 木 晶 子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、明治後期から第二次世界大戦後に至る日本の幼児教育の改革と発展に顕著な功績を残しながら、今日ではほとんど忘れ去られている和田実（1876-1954）を取り上げ、彼の幼児教育の理論と実践の分析を通して、その特質を明らかにするとともに、彼の歴史的な再評価を試み、和田を、戦前戦後の日本の幼児教育界をリードした代表的指導者である倉橋惣三（1882-1955）の「先行者」として位置づけようとしたものである。本論文は、「序章—本研究の意図および構成」と3部7章から成る本論、そして「終章—日本の近代幼児教育史上における和田実の再評価」によって構成されている。

「序章」で、論者は、和田実の生涯とその主要な業績を簡単に紹介するとともに、本研究の意図と課題に言及している。すなわち、論者は、先行研究が和田をどう理解し、どう評価しているかを綿密に検討して、その問題点を指摘し、自らの研究の立場を明確にしている。先行研究では、論究の主眼が和田の「遊戯的教育論」に置かれていたのに対して、本論文では、そのみならず、「訓育的誘導論」をも視野に入れ、両者を彼の幼児教育理論の全体として捉えること、さらに、彼の設立した目白幼稚園での実践に基づいた「幼稚園論」をも考察の対象に加え、理論と実践との関連を把握することが試みられる。

第Ⅰ部「和田実における『幼児教育論』成立の歴史的背景」では、幼児教育の理論研究と実践に捧げられた和田の生涯があらためて詳細に辿られるとともに、彼が欧米の近代教育思想から甚大な影響を受けつつ、近代日本の幼児教育の歴史のなかで彼独自の幼児教育論を構想し、展開していく過程が解明される。

第1章「幼児教育に生涯を捧げた和田実」では、論者は、和田の生涯を「前半生（1876-1904）」、「東京女子高等師範学校嘱託・助教授時代（1905-1912）」、「同校附属小学校専任時代（1913-1915）」、「在野活動期（1915-1954）」の三期に分けて考察し、和田が小学校教師を経験した後、幼児教育界に入ったことが幼児教育と学校教育の違いを強く意識するようになったこと、幼児教育界に踏み込んだ3年後にすでに『幼児教育法』（1908年）という画期的な著作を著したこと、下野後、幼稚園や保育者養成所を設立し、実践に尽くす一方、幼児教育関係雑誌に健筆を揮い、理論と実践双方で活躍したことなどを強調している。

第2章「和田実における『幼児教育論』成立の歴史的背景」では、まず最初、和田が欧米の近代教育思想の影響を受けつつ、それを日本の実情に合うように再構成し、彼独自の幼児教育論を構築するという彼の欧米近代教育思想受容の特徴が明らかにされる。次に、日本の近代幼児教育の歴史が概観され、そのなかで構想され、展開された和田の幼児教育論がどのような斬新さをもっていたのか、論者の主張が述べられている。

第Ⅱ部「和田実の『幼児教育理論』」では、和田の幼児教育論の基礎を成している基本的視座が明らかにされた後、和田の幼児教育に関する理論が「遊戯的教育論」と「訓育的誘導論」に分けて考察されている。

第1章「和田実における『幼児教育』の基本的視座」では、論者は、和田が幼児教育の「意義、必要、対象」についてどのような見解をもっていたのかを解明するとともに、和田が、幼児教育は幼児の発達段階を考慮した「誘導的方法」によるべきこと、また学校教育にない幼児教育独自の特色には①「主観的形式的」、②「誘導的感化的」、③「娯乐的・遊戯的」、

④「個別的」の四つがあることを強調していると指摘している。

第2章「和田実の『遊戯教育論』」では、和田が欧米の多くの遊戯説に学びつつ、幼児生活の中心を成す「遊戯」が「幼児自然の本能に基く自発活動」であること、幼児の遊戯をその特性に応じて大きく三分し、①「取得の経験的遊戯」、②「模倣的発表遊戯」、③「練習的構想的発表遊戯」のそれぞれにおいて幼児固有の能力を発達させ得ることを明らかにしたことが論じられている。また、彼の「遊戯教育論」が当時支配的であったフレーベル遊具（恩物）中心の幼児教育や「遊戯、唱歌、談話、手技」という保育4項目による幼児教育を批判し、保育項目の一つに過ぎなかった遊戯を中心に幼児教育を組織する「余りにオリジナルな部分が多」いものであった（倉橋惣三の評）ことも論証されている。

第3章「和田実の『訓育的誘導論』」では、幼児期におけるしつけと習慣教育の重要性が考察される。和田は一定の習慣に慣れさせる「訓育」を人間形成の根本であると考え、家庭と幼稚園では訓育を「誘導」という、知らず知らずのうちに幼児を教育の目的に向かって感化し、導いていく方法で行うべきことを説いている。幼児期に身につけるべき習慣とは①「生理的習慣」、②「動作的習慣」、③「言語的習慣」、④「精神的行為に属する習慣」である。とくに④では、和田は9個の特性を挙げ、幼児期にこれらの特性を育成したならば、幼児の品性は発展し、完全な人格を成就できるであろうと力説している。

第Ⅲ部「和田実の『幼児教育実践論』」では、論者は、和田の「幼稚園論」の分析を通して、彼の実践の実像を明らかにし、彼の幼児教育理論と実践との関連を浮き彫りにしようとしている。

第1章「和田実の『幼稚園論』」では、和田の「幼稚園論」の形成過程とその構成が考察される。和田は世間の幼稚園への無理解・非難に対して幼稚園教育の必要性を啓発する一方、幼児教育界に対して自らの実践に基づいた幼稚園教育と経営の在り方を説く論文を幼児教育関係雑誌に発表し続けた。それらの論文が纏められて、彼の「幼稚園論」が成立する。それは大きく分けて①幼稚園の必要性、②幼稚園教育の実際、③幼稚園の経営の3部から成っている。

第2章「『幼稚園論』における幼児教育理論と実践の関係」では、和田にあって幼児教育の理論と実践が互いに「相即不離」の関係にあることが明らかにされている。その関係は、例えば、和田の最後の著作である『保育学』（1943年）が「遊戯的教育論」と「訓育的誘導論」という二つの理論的部分並びに「幼稚園論」という実践的部分から構成されているところに端的に現れているとされる。

「終章」では、和田が今日なぜ忘れられたかが検討され、その理由として彼が倉橋の巨大な影に隠れてしまったこと、幼児教育史の人物研究も倉橋に集中したことが挙げられている。しかし、論者は、和田こそ幼児の自発活動である遊戯中心の幼児教育を日本で初めて提唱したのであり、その先駆性はより高く評価されて然るべきであると強調している。

論文審査の結果の要旨

和田実は明治後期、保母中心、恩物中心で、形式主義に陥っていた「保育」に疑問を抱き、フレーベルの根本精神に立ち返って、幼児の自由な自己活動を尊重し、幼児中心、遊戯中心の幼児教育への転換の必要性を日本で初めて提唱するとともに、それを実践すべく自ら幼稚園を設立し、欧米の近代的な教育思想の影響を受けつつ、園児の生活実態の把握にも努め、日本の子どもの具体的現実に応じた幼児教育論の構築に生涯を捧げた人物である。彼が近代日本の幼児教育の理論的基礎づけと発展に果たした役割はきわめて大きいと言えるが、その大きさに比して、今日では倉橋惣三という巨大な存在の影に隠れて、和田実の名はほとんど知られていない。したがって、そのような彼に着目し、彼の幼児教育に関する理論と実践の全体像を捉えて、その特質を明らかにし、併せてそれが当時の幼児教育界でいかに革新的であったのか、また彼は倉橋といかなる関係にあったのかを考究し、和田の歴史的再評価を試みようとした論文の構想自体に、すでに本論文の独創性が現れていると言うことができる。

和田実を本格的に取り扱った先行研究はあまり多くないが、論者はそれらを検討した結果、先行研究の評価の重点は彼の幼児教育論のなかでも「遊戯教育論」に置かれていることを明らかにしている。本論文は、このような立場に立つ先行研究に多くを学びつつも、和田の幼児教育論の特質を見極め、それが単に「遊戯教育論」だけでなく、「訓育的誘導論」と併せて理論的部分を成し、さらに「幼稚園論」という実践的部分を加えて一つの全体として構成されていることを指摘している。また「遊戯教育論」と「訓育的誘導論」の双方に焦点を当てた数少ない先行研究において、和田が「遊戯」とともに「訓

育」を取り上げたことは幼児の生活の「二元的把握」であるとの否定的評価がなされているのに対して、論者は、たしかに「遊戯」と「訓育」は理論上、説明の便宜のために二つに分けられているが、幼児の生活のなかでは一つにつながり、実践論である「幼稚園論」では両者は一つに融合されて論じられていると反論している。このように、本論文は、先行研究が無視したり、個別的、断片的に評価したりしてきた和田の幼児教育論の全体と本質を構造的に捉えており、そこに優れた学問的価値の一つが認められる。

またそれと関連して、論者が和田の幼児教育論を全体的、包括的に捉えようとするに当たり、和田が当時の主たる幼児教育雑誌『婦人と子ども』（のちに『幼児教育』、『幼児の教育』と改称）に掲載した多数の論文を丹念に読み込み、主要著書の論述の陥欠を補うとともに、幼児教育をめぐる時代状況や幼稚園の実態の把握に活用した点も高く評価することができる。なかでも、論者が先行研究には見られない和田の「幼稚園論」の具体的説明をなし得たのは、彼の雑誌論文を詳細に検討した大きな成果である。

現在の幼児教育（学）界の評価をみれば、近代日本の幼児教育はあたかも倉橋惣三から出発したかの観が強い。たしかに、戦前戦後を通じて倉橋は幼児教育界をリードする「官」の場に身を置き、斯界の「権威」として君臨した大御所であり、体系的な幼児教育理論の構築と幼児教育（制度）の改革に多大の貢献をなしたことは紛うことなき事実である。その貢献は誰もが認めるであろう。しかし、倉橋は果たして、これまでの「定説」のように、フレーベル研究や英米の新教育運動における児童中心主義の調査研究だけで、自らの幼児教育理論を構築したのであろうか。

本論文の今一つの優れた学問的価値は、このような問いを立てることによって、和田と倉橋との影響関係に焦点を当て、和田によって初めて基礎づけられた革新的な遊戯中心の幼児教育が倉橋によって「吸収」され、「体系的に完成され」て、一般に広められた点を実証しているところにある。論者によれば、和田と倉橋は数年間ではあるが、東京女子高等師範学校附属幼稚園に同時に在職しており、また『婦人と子ども』の編集も和田の後を倉橋が担当するなど、両者には密接な関係があり、和田は倉橋より早く幼児教育界に入った先輩として、倉橋に影響を与えていたという。また論者は、倉橋の幼児教育論を検討吟味することによって、和田が倉橋に与えたであろうと思われる影響を探り、その影響を①「恩物の克服」、②「遊戯」及び③「誘導」に関する考え方、④「一般教育における幼児教育の位置づけ」の4点に見いだしている。そのうち注目に値するのは、和田が恩物中心の保育を批判し、遊戯中心の幼児教育を提唱したのは倉橋に先立つこと13年、また和田による「無意識的感化誘導若しくは暗示的模倣的誘導」の教育方法の主張は倉橋の「誘導的保育案」に先立つこと20年であり、和田は倉橋の幼児教育論の構築に一つのモデルを提示したことが指摘されている点である。このように、これまでの倉橋研究ではほとんど触れられることのなかった彼に対する日本の幼児教育界の先達からの影響が指摘された意義は決して小さいものではない。同時に、こうした考察によって、和田が日本の幼児教育史上に「遊戯中心の幼児教育への道を切り開いた近代日本の幼児教育の先駆者」として確固たる地位を占めていることが明らかにされたことの意義も大きい。

本論文は、以上述べたごとく、学問的に高く評価できる点が多々あるのであるが、しかし、問題点がないわけではない。第一に、論者が和田の幼児教育論の全体像を描こうとして、彼が活躍した時代の背景や教育状況、欧米の近代教育思想や実践の流れを捉えようと努力したのは評価できるが、その叙述がやや平板に流れ、深みに欠ける箇所がところどころに見受けられるのが惜しまれる。第二に、和田における欧米近代教育思想の受容を検討するに当たり、もっぱら和田のテキストだけに頼り、同時代の日本人研究者がそれをどう受容したのかという比較の観点がないために、論者が言うところの、和田による欧米近代教育思想の「日本化」しての受容という特徴も実証性をいささか欠いたものになっている。第三に、和田の幼児教育論に関する論述のうち、とくに、教育の実践面、つまり教育内容や方法に関する論述において、論者自身の評価や見解が十分に展開されていない嫌いがなくもない。

もとより、これらの問題点は論者の今後の研究によって解決されるべき課題であり、日本の幼児教育史研究に新たな地平を開いた本論文の価値を損なうものでは決してない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成12年3月8日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。